

令和5年度教員採用選考試験の合格を目指して  
**教職支援センター活動報告①**  
 —教職への道を確かなものに—

椋本久雄  
 (教職支援センター特定教授)

はじめに

京都女子大学教職支援センター勤務となって5年目を迎える令和4年度。教職支援センターの私が取り組んだ諸業務が、教員採用選考試験に臨む4回生の学生たちの一助となり得たのかの検証を含めて報告させていただきたいと考える。

平成30年(2018年)4月、京都市立中学校の現職教員として培ってきた教育現場の管理職としての経験と京都市教育委員会の教育職として教員採用に関わってきた経験や学校経営に関わってきた経験を活かせるということで教職支援センター特任教授(令和4年度から特定教授)として着任することになった。5年目となった令和4年度、これまでに取り組んできた職務内容の確かな振り返りを行うことで今後さらに教職支援センターの取組の改善が図られることを願いたい。

1. 年間活動を振り返って

右の表は、1年間の教職支援センター特定教授として私が関わった職務内容である。

4月当初は、事務方の仕事量も相当なものとなる。つまり、本学から多くの学生が受験している自治体を中心として「**教員採用選考試験説明会**」の開催時期と、大学推薦を実施している自治体の**推薦候補者の面接**とがほぼ同時期に重なることで慌ただしさが日々の業務に押し寄せてく

主な活動内容 (本文中に掲載したものはゴシックで示した)
○教職実践演習(中・高)後期 オムニバスにて6講座各8時間を担当, 114名受講。
○教育実習論(新カリ)通年 6講座各8時間を担当, 108名受講。
○教職支援センター運営委員会(副委員長)。
○教育実習巡回指導(児童学科9名の小学校教育実習, 研究授業参観及び指導助言)。
○教員採用選考試験の大学推薦候補者の面接。
○連合教職大学院進学者選抜に関わる面接。
○京都地区大学教職課程協議会, 教育実習反省会への参加。
○関係教育委員会の教員採用選考試験説明会等の対応。
○教員採用選考試験対策としての学生指導(個人面接, 集団面接, 集団討論, 模擬授業, 場面指導, 進路相談)。
○教職応援セミナーの開催。
○教職ハンドブックの補筆。

る。さらに、今年度から新カリキュラムによる「**教育実習論**」の授業が加わった。通年(8回)の授業とは言え、4回生で実施される教育実習の多くは、早い実習校では5月後半から始められるために、年度初めより5週間にわたって、つまり学生たちの教育実習が始まる前に教育実習の意義、目的、心構え等を学ばせる必要がある。また、本年度養護・福祉教育学専攻の学生で「**保健**」の教員免許を取得する予定の学生の中には、4月の年度当初より養護教諭の教育実習が予定されている学生がおり、通常の授業には参加できずすべて「**公欠**」扱いとなる学生が出てくることになった。そのため、急遽前年度に教育実習前の授業を集中的に実施することで何とか事なきを得ることができた。

さらには、2月から教職支援センターとして実施している、個人面接等の「**学生指導**」も年度が改まって、より希望者が増えてくる状況下の4月、5月は、「**教育実習論**」の授業とその授業の合間を縫って教員採用選考試験対策の**個人面接指導**の時間が組み込まれる。昨年度との違いは、コロナ感染防止対策として行ってきた、Zoomによるオンライン指導が大きく減少したことである。これからのWITH(ウィズ)コロナの社会のあり様を考えると十分な感染対策を取ったうえでの「**対面指導**」は、Zoomによる「**オンライン指導**」に比べてやはり内容が濃いものとなる。また、この時期には、昼休みの時間を利用して実施される主な**自治体の令和5年度教員採用選考試験の説明会**の司会進行を行い、さらに大学推薦候補者の面接にも参加した。

6月、7月は**個人面接, 集団面接, 集団討論**等、教職支援センターの業務である「**学生指導**」を中心に取

り組むことになる。そのような中で、4名の教育実習生の巡回指導を依頼され、事前事後の面談と実習校への巡回指導に当たった。いずれも出身小学校での母校実習である。各実習生ともに緊張してはいるものの京女生としての自覚を持ち、堂々と授業実習を行っている姿に誇らしさを感じた。そして、私にとっては児童と直接触れ合うことで、元気な児童からエネルギーを享受できることが何よりも喜ばしいことである。

夏季休業中の8月の教職支援センターの主な業務は、教員採用選考試験の一次試験に合格した学生への「学生指導」である。その内容は、これまでと同様の個人面接指導に加えて、**集団討論指導**、**模擬授業指導**、**場面指導**など教育現場で想起される内容に対する臨機応変な回答が求められるものとなっている。なかでも京都市の2次試験の集団討論課題は、内容が複雑で現場での経験のない現役学生には難しい課題となっている。また、模擬授業や場面指導も短時間に何をどのように回答すればよいのか、訓練が求められるものである。

9月に入り後期の授業（「**教職実践演習**」「**教育実習論**」）が再開される中で、教員採用選考試験の合否の結果が発表され、合格の連絡のために教職支援センターを訪れる学生と会えることがこの上ない喜びとなる。また、不合格の連絡を伝える学生には、私学の募集や講師登録の方法など、諦めることなく取り組むことを指導している。また、今年度は、後期の授業の合間を縫って児童学科の4回生4名の小学校実習の巡回指導に赴き、充実した時間を過ごすことができた。また、授業と並行して、教職支援センターが昨年より取り組んでいる「**教職応援セミナー**」を開催し、3回生への計画的な教職試験対策の必要性を指導している。

## 2. 相談利用状況について

令和4年2月から10月までに私が担当した学生の相談利用数の詳細である。

表1 月別相談利用者数（実数と延べ数）

	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	合計
実数（人）	9	8	23	24	32	34	31	4	4	169 (261)
延べ数（人）	16	12	47	45	59	70	61	5	4	319 (617)

（ ）は昨年度合計数

教職支援センターでは、後期の授業が終わる2月から「**学生指導**」として、面接指導を実施している。令和4年度（令和3年度2、3月含む）の私の月別相談件数は令和3年度と比べてみて、実数で約100人、延べ数では約300人の減少となった。これは面接指導の時間を7コマ設定しているが、昨年度の反省に立ち全てのコマを埋めることを避けたことと前期の教育実習論の授業（通年）が入ったことにより、面接指導の機会が減少したことによるものと考えられる。また、6月から教職カウンセラーの方々の協力により、集団討論の指導を週2回定期的に実施していただいたことで学生の希望が分散できたことによるものと考えられる。

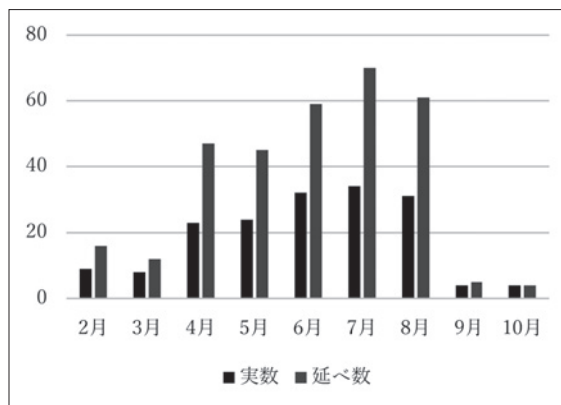


図1 月別相談利用者数（実数と延べ数）

下の表2は学科・専攻別の学生利用数であり、実数は、教職課程を履修している4回生のうち、私が学生指導を担当した学生数である。昨年の実数と比較して、17人少ない状況であった。昨年と異なる傾向ではあるが、学生指導が一度で終わることなく、複数回の指導を通して上達が際立つ学生が多く見られたのが特徴的であった。

表2 学科・専攻別相談利用数

	国文	英文	史学	食物栄養	現社	法	教育学	音楽	児童	養護福祉	合計
実数（人）	3	2	4	4	4	1	24	4	2	17	65
延べ数（人）	16	15	31	29	25	2	97	8	5	91	319

右の図2のように中学、高等学校担当ではあっても、小学校教諭を希望する教育学専攻の学生や養護教諭を希望する養護・福祉教育学専攻の学生との学生指導が実数、延べ数ともに多くなっている。やはり、入学当初からの明確な進路目標を持っている学生が多いことに起因するものと考えられる。

一方、文学部（国文学科、英文学科、史学科）、現代社会学部、法学部、家政学部の学生の相談利用数が低迷しているのは、教職課程を履修している学生数が少数であり、また入学時より明確な志望理由を持っている学生が比較的限られているため、積極的に利用しようとすることに躊躇している状況がうかがえる。

右に示した表3と図3は、教職支援センターに業務委託で勤務していただいている教職カウンセラーの方々の年度初めより10月までの相談利用数の昨年度との比較である。4月から8月までの繁忙期は、3名のカウンセラーが出勤し、それぞれ相談業務や添削指導に当たっていただいている。業務委託ということもあり、年度をまたぐ指導は、かなわないこともあるが、昨年と比較して6月から8月の相談利用者数が大きく伸びていることが見て取れる。これは、教職支援センターとして、カウンセラーの方々に集団討論の練習機会を計画していただくことで、学生のニーズに応えたものである。1週間に2日の練習日を設定し、8名で討論を実施し、それ以上の参加者は見学という形で取り組んでいただいた。現場の教員経験はないものの社会人として身に付けていなければならない面接時のマナーや経験値が、学生たちのニーズに対応できていたと感じる。

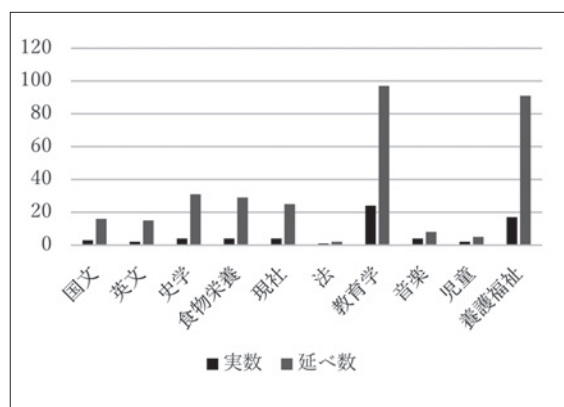


図2 学科・専攻別相談利用数

表3 教職カウンセラーの相談利用数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	合計
令和3年度	118	121	77	172	79	24	3	594
令和4年度	132	170	303	270	135	26	21	1057

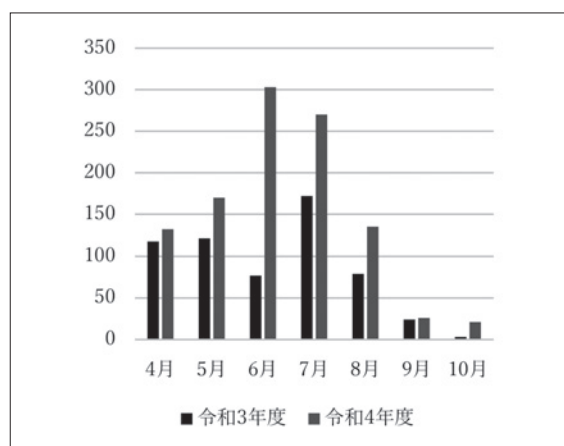


図3 教職カウンセラーの相談利用数

### 3. 教職応援セミナーの開催

教職を目指す学生たちは、1回生から教職課程の科目を選択履修し、4年間の学びを積み重ねて各自が希望する校種の教員免許状を取得する。その間、教育実習をはじめ、介護等体験事業、学生ボランティア等々の学外での多くの学びを修得する必要がある。教員を目指している学生たちに少しでも応援できることはないか、教員採用選考試験までの計画的な学修を進めることができるよう教職支援センターが主体となって、「教職応援セミナー」を昨年度より開催している。（次ページ参照）

この応援セミナーは、主に2回生から3回生にかけての時期に、改訂された「教職課程ハンドブック」を持参し、次ページに示したように1回から7回までの講座を開講し、教育現場での学びを経験するための心構えや採用試験に臨むために必要な自己分析や志望動機、自身が目指す教師像など、各自治体が実施する教員採用選考試験や私立学校の選考試験に対応した基本的な学びを提供し、教職への理解を深める機会としている。各回とも昼食時の限られた時間ではあるが2度実施し、そのあとに各回の詳細についてフォローアップ指導を各回ともに2度にわたって実施し、希望する学生に対応している。1回～3回のセミナーは、教育学部教授と我々特定教授が担当し、4～7回のセミナーについては、教職カウンセラーの方が主体となって実施している。昨年度の反省から、今年度は4回から7回のセミナーの内容について、我々特定教授とカウンセラーとの間で、事前の内容検討会を実施し、またフォローアップの指導にも特定教授が協力して、より具体的な指導を行うことができるようになった。

【講座内容】

回	対 象	講 座 名	講 座 内 容
1	2回生 7月期	教育現場で学ぶ ～学生ボランティア・教育実習～	ボランティア・教育実習に臨むにあたって ○心得や観察の視点を理解する
2	2回生 10月期	教育現場で学んだこと・課題	教職課程ハンドブックに振り返りを記入 ○振り返りから学んだことや課題を共有し、新たな視点に気づく
3	3回生 春	2回生までの振り返りと今後の課題	ハンドブック ○振り返り・リフレクションシートの活用
4	3回生 10月期	自己分析・自己PRを考える	教育現場での学びから ○自分を知ろう（長所・短所 得意・不得意） ○自分の良さを伝えるために
5	3回生 11月期	あなたが目指す教師像 ～志望理由～	あなたが、子どもたちが、保護者が、考える ○理想とする教師とは ○信頼される教師とは
6	3回生 12月期	教員採用試験に向けて ～基本的なマナーを知る～	○身だしなみ、言葉遣い、立ち居振る舞いなど
7	3回生 1月期	面接 ～思いを伝える～	個人面接・集団討論など ○各々のねらいを理解した思いの伝え方

#### 4. 成果と課題

令和4年度は、コロナ感染拡大が消滅したわけではないが、WITH（ウィズ）コロナ社会の中で、教職を目指している学生にいかに的確で効果的な支援ができるかが問われた。後期の授業が終了する2月以降実施している「学生指導」は、昨年度から1日7枠設定し、40分間の指導時間で教職カウンセラーの方々とも連携し、軌道に乗って取り組むことができるようになった。また、教職応援セミナーについても、昨年と比べて、昼休みのセミナー教室が新しいE棟で確保でき、フォローアップ指導も実際の教室を模したC208教室で実施できたことは学びを深める上で役立った。

教職支援センターとして、学生たちへの支援を充実させていこうとすれば、課題となってくるのが、指導教室の確保の問題である。A、Q校舎の解体により、教室の絶対数が減少している状況下で、学生指導が多くなる4～7月の指導教室を如何にして確保するのか、学生指導ができる人員は、カウンセラーも含めて最大6人が対応できるが、同時にその数の教室を確保できるかが課題となってくる。

私が担当している授業は、中学・高等学校の教員免許を取得しようとしている学生への「教育実習論」と「教職実践演習」である。旧カリキュラムでもそうであったが、新カリキュラム下での「教育実習論」の授業を担当しているものの、受け持ちの学生たちが経験する中学校や高等学校への巡回指導に参加できていないことが、残念なことであり悔やまれるところである。これまで児童学科、教育学専攻、音楽教育学専攻の学生について、担当の先生方の受け持ち授業との関係で、巡回指導の依頼をいただき実習校への巡回指導に参加させていただき、現場での教育実践を直接体感することができた。しかし、私が授業を担当している「教育実習論」の学生たちの中学校や高等学校への巡回指導には赴けていない。教職支援センターに在籍する私の至らなかつたところではあるが、中学校、高等学校の教員免許取得を目指す学生達の学科の先生方との連携をもっと密に取るべきであった。そして、学科の先生方が授業との関係で巡回指導できない状況について知らせていただけたら、すべてに対応はできないまでも、中学校、高等学校で教育実習を行っている学生の巡回指導を体感することで、中学校、高等学校の教育現場の現況を授業に活かすことができたのではないかと悔やまれるところである。

5年間に及ぶ京都女子大学の学生達（616名）との授業・指導・相談を通しての交流は、私にとっては充実した日々のエネルギーともなった。京都市立中学校の教育現場や教育委員会（教職員人事課及び学校指導課）での実務経験が、教員を目指す学生たちの学びの一助になったのかどうか、課題を残したまま引き継ぐことをお許し願いたい。